

近世後期における四国遍路の普及 ―菱垣元道を事例として―

井上 淳（愛媛県教育委員会生涯学習課専門学芸員）

The spread of the Shikoku pilgrimage during the late modern era

- The example of Higaki Gendō

Jun INOUE

Curator, Lifelong learning division, Education Committee, Ehime Prefecture

The popularization of the Shikoku pilgrimage during the Edo period (1603-1867) was largely due to the publication of "Shikoku Henro Michishirube" by the Buddhist priest, Shinnen (d. 1691). This book, published in 1687, was the first full-fledged guidebook on the Shikoku pilgrimage and, after going through several revisions and additions, continued to be read until the Meiji era (1867-1912). In 1763, Shuei Hosoda published the first map of the entire Shikoku pilgrimage entitled, "Shikoku Henro Zue" and other maps on the Shikoku pilgrimage were printed after this. Most of the guidebooks and maps on the Shikoku pilgrimage were created from the viewpoint of the Kansai area and printed in Osaka. This, this paper will examine Higaki Gendō, who was influenced by this publication culture of Osaka and who worked to spread information about the Shikoku pilgrimage. In his book, "Takaratsukamidori", he describes his personal experiences and from such information we can determine what sort of person he was. For example, he came from a merchant family who were involved in the market price of rice in Osaka and when he was young he traveled on a pilgrimage around Japan, and almost every year made the Shikoku pilgrimage. He also worked as a director in the Saigoku region for the Tsuchimikado Family and was a diviner and doctor who made an incredible salary of 1000 ryo per year. With such a large income Higaki self-published books to give to people and one of these was "Shikoku Dōchū Tebiki Annai" - a sort of guidebook for the Shikoku pilgrimage - which also included a *nokyochō* (book of blank pages for the temples to stamp and sign). This book was published in 1802 and it was his wish to give away 50,000 copies. Information on how to prepare for the journey, food and money, how to get to Shikoku by boat, cost for the pilgrimage book, how to fill out the votive slips and the necessary amount of papers needed, as well the route to take and information on the temples was included. An extremely detailed explanation was also provided so that people leaving Osaka on the pilgrimage would not be worried. It took thirteen years to reach the target of donating 50,000 copies, but later a revised book with recommended sea routes from Osaka to Tadotsu in Kagawa prefecture was produced. It is clear that by looking at the amount of copies given away through the charitable actions of Higaki Gendō that he greatly contributed to the spread of the Shikoku pilgrimage throughout the Kansai region.

1. はじめに

江戸時代の四国遍路の普及に、真念が著した『四国辺路道指南』が果たした役割は大きい。『四国辺路道指南』は、初めての本格的な遍路の案内記であり、貞享4年（1687）の刊行後、改訂や増補を重ねながら利用され、明治時代まで読み継がれていった。また、宝暦13年（1763）には、細田周英により四国遍路の全体像を視覚化した『四国偏礼絵図』が刊行、以後も数種類の四国遍路図が作成されている。これら遍路のガイドブックや案内図の多くは関西からの視点で作成され、大坂で刊行されたが、本稿ではそうした大坂の出版文化の延長線上にあった、文化期を中心とする菱垣元道による遍路の普及活動を紹介する。

2. 菱垣元道について

菱垣元道については、伊予吉田藩の御用商人をつとめた高月家（法華津屋三引）の蔵書にあった一冊の版本で知ることになった。前表紙には中央に題簽があり、所蔵者である九代目当主の高月古右衛門（虹器）の

ものと思われる筆により「御室御所并東寺納経／四国納経帖」と記されている。後表紙には、右下に「与州吉田町／高月古右衛門」と墨書されている。

前表紙をめくると、扉には中央に大きく「四国八拾八箇所納経一部」と書名が入り、その右側上部には「御室御所／施本御免」、右側下部には「ひがき」の文字を取り囲むように「大坂／本町橋／東詰／一法師」の文字が印判のように配されている。書名の左側には、「為四国廿一度廻願成就供養／納経帳五万冊施本之内」とあり、その下に「五万式千四百卅三人目」と墨書されている。この部分は空欄にしておき、冊子を配布する度に何人目かを墨書するようにしていたのであろう。さらに行を変えて、「願主 一法師法眼 菱垣元道橘義陳（花押）」とある。

扉をめくると、右の頁に歩いている行者姿の男を描いた挿絵が現れる（図版1）。男は左手に杖、右手に念珠を持ち、菅笠をかぶっているが、その笠には、「四国八十八ヶ所／摂州大坂住／寂範一人」の文字が見える。背負っている笥には「四国二十一度」とあり、笥の上には観音開きになった厨子が乗り、その中には椅子式の牀座に結跏した弘法大師像が収められている。背景には遠い山の中に寺院が見え、願主である元道自らが四国遍路をしている姿が描かれているものと解釈できる。詞書には「只ひとり山坂にて／しんどさのあまり／後世の為に成かハ／真のやミ／かゝげて照せ／のりの燈火」とあるが、遍路を通じて闇を照らす灯火のように仏法を広めたいという元道の思いが記されている。



図版1 『四国道中手引案内納経帳』

そして、左頁の1行目に「四国道中手引案内」と内題があり、遍路の旅に出ようとする人々に向けて記された本文が13丁にわたり摺られている。本文後に大坂から多度津へと渡海する航路を描いた色摺りの絵図をはさみ、所有者の高月古右衛門が遍路した際の納経の記録が続く。扉に「四国八拾八箇所納経一部」とあったように、配布時には54丁分が白紙となっており、ここに寺社の納経を記録していく納経帳のスタイルを採っていることがわかる。最後の奥付には、心願により10万冊の施本を目指すという文章に加えて、「享和二壬戌ヨリ少興」の刊年とともに、板元名として菱垣元道の名前が挙げられている。

高月家の蔵書から発見された一冊の版本は、四国遍路の入門書と納経帳がセットになった『四国道中手引案内納経帳』ともいえるもので⁽¹⁾、大坂本町橋東詰に住む菱垣元道橘義陳が出版している。この菱垣元道とはどういう人物なのか、次にその人物像について検討を加えたい。

『四国遍路手引案内納経帳』からは、元道が21回にも及ぶ遍路を行った「つわもの遍路」であり、扉に「御室御所施本御免」とあるように、京都の門跡寺院である仁和寺と関わりがある大坂在住の僧、寂範という顔をもっていたことがわかる。また、国文学研究資料館の古典籍総合目録データベースによると、以下の4件の著者であったことが確認できる。

弘法大師奇妙記（こうぼうだいしきみょうき） 1冊 真言 文化年間刊

宝抓取（たからつかみどり） 3巻3冊 心学 享和・文化頃

福德金銀蓬萊山（ふくとくきんぎんほうらいさん） 1冊 仏教

無病延命記（むびょうえんめいき） 1冊 医学

これらの本の中で、最も流布しているのが2番目に挙げた『宝抓取』で、古典籍総合目録データベースに掲載された諸本を見ると、1冊本の享和2年（1802）版と、3冊本の文化9年（1812）版があったことがわかる。このように版により冊数が異なる事情については、享和2年版の『宝抓取』発旦の文章にうかがえる⁽²⁾。それによると、『宝抓取』の刊行は享和2年に始まり、1年ごとに文章が書き足されていき、文化5年までの約6年間に112貫500目程の費用をかけて5万冊を施したとある。その後も内容が増補されていき、文化9年版からは上・中・下の3冊本に改められ、出版・施本が継続されている。高月家の蔵書にも『宝抓取』が見出せるが、それは上・中・下に前編、後編を加えた5冊本となっている。その奥付には「文化九壬申歳十一月七度目再版」とあり、文化9年版になっても7度の増補改訂が行われ、その結果として3冊本が5冊本へと体裁を改めたものと思われる。文化9年版上巻の本文冒頭には「宝抓取廿万人へ施す発旦之事」と題し

て、当初5万冊を目途に始めた施本が10万冊に到達、改めて20万冊を目標として継続することが記されている。

このように何度も増補改訂を繰り返し、大量に配布された『宝抓取』には、かなりの種類の異本が遺されているものと思われる。出版スタイルも、商業出版ではなく、菱垣元道による自費出版であったことは明らかであるが、上巻には大坂の本町橋詰にあった元道の広大な屋敷図が見開きで描かれるとともに、「書林河内屋喜兵衛」「画工秀延斎玉洞」「筆工青陽堂雲雅」のほか、出入細工方として「板木師内田新助、山崎庄九郎」「板摺方石川定七」「仕立方表紙屋伊八」といった具合に、出版に関わった人物の名前が列記されている。そこには大坂書肆の「河内屋号一統」の中で本家であった河内屋喜兵衛の名前があり、自費出版とはいえ、大坂の出版文化の影響下で『宝抓取』が刊行されていたことがわかる。

自らが体験したことや見聞きしたことから教訓を汲み取るようなスタイルで記された『宝抓取』には、元道の出自や経歴に関わる情報が散りばめられており、それらをつなぎあわせることで、その人物像が浮かび上がる。元道は宝暦4年(1754)年11月26日、大坂の繁華街、天満市之町の米穀商の家に生まれるが、米相場の下落により多額の損失を受けた父親が健康を害し、元道9歳、弟7歳の宝暦12年に亡くなっている。その後店をたたんだ一家は困窮し、弟は親戚の尼崎の商人、塩屋源兵衛に預けられている。元道は自活するために「糠買、灰買、浄瑠璃語り」と仕事を転々とするが、安永7年(1778)頃の25歳の時、いろいろなトラブルから世間がうとましくなり旅に出る。その廻国巡礼の旅は9年間続き、34歳までに日本65カ国を廻っている。大坂に戻った元道は、「斯賤き我を日本陰陽の頭土御門殿の御目鏡ニ預り、御召抱と相成医道陰陽道の役義を蒙る」とあり、京都の公家土御門家に仕える陰陽師・医師となっている。『宝抓取』にも、元道が人相・家相・地相などを占う話し、患者を診察する話しなどが多く収録されている。

元道の人物像をまとめると、大坂の米相場に関わる米穀商の出身で、若い頃に父親を亡くし、日本廻国巡礼の旅を経験している。京都の仁和寺は、江戸の東叡山寛永寺とともに、廻国巡礼六十六部を統括する地位にあったとされるので、仁和寺との接点は、元道の廻国巡礼の経験に求められるのかもしれない。また、元道は毎年のように遍路をして歩く「つわもの遍路」であり、さらには土御門家に仕える陰陽師・医師となっている。彼の著書、『弘法大師奇妙記』には、「天社神道陰陽道／西三十三ヶ国吟味取締／土御門殿家司出役／大坂御用所常勤」、『飢餓効毒無病延命記』には、「西三十三ヶ国陰陽道取締御用所」と自らの肩書きを記しており、土御門家が組織する陰陽師の西国取締役をつとめていたことがわかる。仁和寺と関わりのある宗教者、遍路を繰り返す「つわもの遍路」で、土御門家とつながる陰陽師・医師というようにいくつもの顔をもつ菱垣元道は、まさしく身分的周縁に位置づけられる興味深い人物といえる。

そして、陰陽師や医師としての活動から得た莫大な収入をもとに、元道は施本活動(自費出版活動)を展開していく。『宝抓取』の上巻には、そのあたりの事情が次のように記されている。

予が方ハ年毎に繁昌いたし候、其証拠ハ施す事夥しく、其子細ハ易道、家相・人相・印相・鏡相・劔相・病相或ハ神相・仏相、何れも甲乙ありといへ共大抵見料金子百疋づゝ、又墨色式勿なれ共宝抓取の本壱冊づゝ進上致す、是ハ大なる損なれ共医業職分故右見料を集め置本代にはらひ、又年中の御祈祷料を集め置、例年十一月冬至祭、八月巳成金祭、右兩度に残らず施しに出す、…(中略)…外の医師陰陽師ハ壱ヶ年に五十兩か百兩か貳百兩ほどづゝはいる事也、予が右之通故天理に叶ふ事ハ壱ヶ年に千兩ほどづゝ集り申候

元道による陰陽師・医師としての活動は年々繁昌するようになり、家相や人相などを見る度に金子100疋(金1分)程度の収入があり、それ以外にも祈祷料などの収入があった。それらの収入を集めておいて、例年8月と12月に施しに出していた。他の陰陽師・医師が年間50～200両の収入であったのに対して、元道には1000両程の収入があったという。その驚くべき金額が元道の施本活動に充てられたことになる。

施本活動の全貌をつかむのは困難であるが、彼の著書『飢餓効毒無病延命記』には「施本十五冊目録」が付されており、古典籍総合目録データベースで確認できた4件以外にも多くの書物が出版、施本されていたことがうかがえる。その中には、『宝抓取』、『弘法大師奇妙記』、『四国道中案内記』、『四国遍路納経帳』など、遍路に関係することが記された書籍が多く含まれており、施本活動の柱の一つに四国遍路の普及があったことは明らかである。それでは、元道が遍路普及の一環として仕掛けた出版物のうち、『四国道中手引案内納経帳』について改めて検討を加える。

3. 『四国道中手引案内納経帳』について

『四国道中手引案内納経帳』は、先の「施本十五冊目録」に『四国遍路納経帳』として登場するが、そこには「大坂より四国海陸案内委敷頭ハシ并ニ難儀なき事をしるす」とある。四国に渡る交通手段を詳しく記すことで、大坂において遍路を普及する意図があったことが明確に示されている。納経帳には丁数で13丁、項目で26箇条に及ぶ「四国道中手引案内」が最初にあり、遍路の初心者に向けて平易な言葉で記されている。以下、箇条ごとにその内容をみていく。

1条目は、遍路の旅に出る際に必要となる往来手形について。日蓮宗と浄土真宗では異なる宗派の寺院の参詣が認められていないため、寺で発行してもらう往来手形に、様々な宗派の寺院がある四国遍路を記してもらいにくい。そこで、日蓮宗では千ヶ所参りか日本順拝、浄土真宗では二十四拝か日本順拝と記してもらうと、宗派の法義も立つと説明している。

2条目は、寺で発行された往来手形を持参すると、元道から納経帳と服薬を施すことが記されている。この納経帳と服薬はこれまでも5万人に施してきたので、知らない人にも広めるようにとある。3条目は、遍路を終えて帰ってきた者に対して、往来手形と船揚げり切手を持参すると、『弘法大師奇妙記』1冊を褒美として与えることが記されている。こちらも既に10万人に施してきたので、知らない人に広めるようにとある。

4～7条目にかけては、遍路に旅立つ際の準備物について紹介している。4条目は、菅笠は深いのが良いとして、「四国八十八ヶ所、国郡所、名前、同行何人」と記すこととされている。そして、国の名前を記していない菅笠をかぶり、納経を持たない遍路のことを「鬼気遍路」と呼び、盗人なので注意するように説いている。5条目では、莫菴か木綿で尻当をつくることを推奨している。足が弱いものは、木の杖を持っていくと良いとあり、さらに食事を取るための箸と汁椀、わらじ、矢立、納札、刻限付と準備物の記述が続く。6条目では、雨への備えとして莫菴を準備するように記されている。蓑合羽は山道で都合が悪いので、首が当たるところに縁取りを付けた莫菴を用意して、両方に紐を付けて持ち歩いた方が良いとされている。煙草は現地で調達できるため不要で、さらに火打、つけ木、懐中ろうそくが準備物として加えられている。

8条目は、大坂から遍路に出る者が最も気にしていたと思われる食事について「食物は貯へるに不及」とあり、現地で調達できることを記している。その上で、米とほったい（大麦を炒って挽いた粉）を2～3合ずつ持ち運ぶこと、めい（ワカメ）を生醤油で煮上げ、天気が良い時に乾燥させて持ち運ぶことを勧めている。ワカメの干したものは軽くて持ち運びが便利で、湯茶にひたして食べても良いとしている。それ以外に持ち運ぶべき副食としては、とうがらし味噌と焼塩を挙げている。

9条目は旅費である路銀の持ち運びについて。「路銀ハ壱歩吉、南鐐ハ損あり」とあるのは2朱銀よりも1分銀を持ち運んだ方が便利という意味であろうか。銀は小分けに包み、その一つずつに「何匁何分」と書いて、両方をくくって腹帯として体に結びつけるようにとあるが、盗難を防ぐために行ったものであろう。

「四国道中手引案内」が、大坂からの遍路向けに書かれていることがよくわかるのは、10条目の四国への交通手段についての記述である。大坂から船で四国に渡るのは「是利に当らず」と退け、尼崎、明石、姫路と陸路を進み、備前の下村から讃岐に渡海することを勧めている。上陸した港では、船揚げり切手もらう必要があったが、丸亀では105文を払わないと切手がもらえないことを記している。また、船揚げり切手がもらえなかった場合も、元道の納経帳を手にした遍路は、土佐までの間に善根で船揚げり切手を書いてもらえるし、多度津に上陸すると費用は元道があらかじめ払っているのので、無料で船揚げり切手が得られるとしている。

11条目は、長丁場の遍路の歩き方について記している。旅立って2,3日間は、足を痛めやすいので道を急がないこと、距離が近くなるからといって無理して難所を進まないことが注意されている。また、「わらんじ喰」といって足に豆ができた時には、鎮痛効果のある半夏の粉を米粒と煉り合わせて厚く塗り、その上に紙を貼って乾かすという治療法を紹介している。さらには、「阿州徳島迄ハ何事も不自由なき故始末して吉」とある。この言葉は、徳島までは経済活動が活発なため、儉約して歩かないと路銀を使い果たして難儀するという戒めであろう。規則正しく、朝六つ（午前6時頃）に出発して、七ツ時分（午後4時頃）までに宿に入るようにして、野宿をしてはいけないとある。

12、13条目には、札所における作法が詳しく記されている。札所に到着した遍路はまず手水鉢で手を浄めるが、12条目には手水鉢がない場合は納経帳に金欄があるので、これを6回頭上におしいただくと不浄を

払うとしている。次に本堂に行き、納経帳と納札を前に置いて光明真言を22回唱える。「四国道中手引案内」の中で「何十何番本尊何如来」と記している箇所を開いて拝み、「一切元祖一切貴祖一切君臣一切有情非情、六親眷属乃至法界平等利益」を唱えて、その後に願い事をする。本堂に納札する時には、飯粒を使って貼り付ける。大師堂についてもそれを繰り返す。13条目は、札所において納経帳に印をもらう際に、12文、6文、3文のいずれかを置くとある。それぞれの懐具合にあわせて出すこともできたようで、路銀を切らしている場合はそのことを断り、厚くお礼を述べるだけでも構わないとされている。初めて四国を廻る旅人の不安を取り除くように、元道が遍路の作法を具体的に記述していることがわかる。

14条目は、煙草の火を足で踏まないことや火の用心を説いている。15条目には元道が作成した納札の図柄を見開きで示した後に、その種類について説明を加えている。納札は「長六寸、巾二寸」、縦18cm、横6cm程度の大きさで、初めて参詣する時には、寸法や図柄が違って構わない。それを札所ごとに本堂、大師堂のそれぞれに納めるので88枚ずつ、宿札として泊めてもらった家に50枚、接待を受けた際に与えるものとして70枚、1回の遍路に必要な納札を合計300枚としている。そして、納札の記述で注目されるのは、2度目の遍路から色札を用いるとされていることである。2度目青札、3度目赤札、4度目黄札、5度目白札、6度目黒札と色が変わっていく。喜代吉榮徳氏は、色札の発生について土御門神道の五行思想に基づいた「四国道中手引案内」の影響が大きいことを指摘しているが⁽³⁾、後世になっても色札という考え方自体は引き継がれ、定着していくことから、妥当な指摘といえる。

16条目、17条目は、接待を受ける際や宿に泊まる際の作法について記されている。16条目は、四国遍路では茶の子（簡単な食べ物）をはじめ、わらじ、髪月代、風呂など、様々な接待が行われていることを紹介している。接待のお礼に70枚の納札を見込んでいることから、四国の道中盛んに接待が行われていたことがうかがえる。接待を受けた時には納経帳と納札を上座に置いて、「家内富貴繁昌息災延命諸願成就、南無大師遍照金剛様」と拝み、光明真言を唱えて札を納めるとある。17条目は宿に泊まった時の作法で、納経帳と納札を上座に置いて「南無大師遍照金剛様」と拝み、光明真言を22回唱えてから納札を仏壇に置く。

18条目には、海や川を渡る時の注意として、「南無さまだ、ぼだなんば、有縁無縁法界万霊」と唱えて水を手向けると怪我をしないとある。19条目には、四国88ヶ所以外の霊場に納経する必要はないが、納経する場合には札所と同じように行うことが記されている。20条目には、病人は丸亀で船揚げり切手がもらえないため、壮健な人と一緒に廻ることを勧めている。21条目は、それぞれの藩の法令により船揚げり切手をもろうのが難しくなっているため、東国・北国からの旅人も大坂経由で多度津に渡海して遍路を始めることを勧めている。

22条目には、札所の名前、本尊、次の札所までの距離などが紹介されている。讃岐の多度津に渡海、船揚げり切手をもらった後、77番札所道隆寺から札を打ち始め、76番札所金倉寺で打ち終わる道順で記されている。遍路を終えて再び多度津に出ると、大坂に直接行く船か、備前の倭加大権現に参詣するための備前下村に出る船があることが案内されている。

遍路が歩く道順は簡単な記載しかないが、その途中に四国諸藩が設けていた番所については、古目番所、佐野番所（徳島藩）、甲浦番所、伏越番所、高知城下入口番所、大深原番所（土佐藩）、小山番所、東多田番所（宇和島藩）、浅海番所（松山藩）が挙げられており、詳細に示されている。とりわけ、甲浦番所については、「土佐一国の宿割日付といふ手形出る、其夜かく所々の庄屋に指宿いひ付、不自由無御座候」とあり、庄屋の指示した宿に泊まり、書付に庄屋の署名、判形をもらう宿割日付というシステムが土佐藩にあることが記されている。遍路の初心者が戸惑わないように配慮が行き届いた記述といえる。

また、この項目の最後には遍路の総距離が紹介されている。阿波と土佐が50丁1里であったのに対して、伊予と讃岐は36丁1里となっていることを示した後、36丁1里に換算して、遍路の総距離を328里半、それに大坂から多度津の往復の距離96里を加えると、大坂からの遍路の総距離を424里半と導き出している。1里3.9kmで計算すると、遍路の総距離は1281km余り、大坂からの総距離は1655km余りとなる。

23条目、24条目は納経帳の取り扱いについて。23条目には、納経帳は大切に仏壇に仕舞い、死後は棺桶に入れることが記されている。1枚ずつ水にうつして飲むと病気を防ぐと効能を説明し、二つ折りにするなどぞんざいに扱うと効能が失われると注意している。24条目では、納経帳を持って遍路をすると、持たずに廻るのに比べて7倍の功德があると説き、仏の体と同じように大事に扱うことが求められている。

25条目は、『四国道中手引案内納経帳』を持って遍路を重ねた場合の褒美について。往来手形を書き替え

て2度目の遍路を行う者には、納経帳、服薬、青色の納札300枚に、讃岐までの船賃・雑費を与えている。3度目は2度目に与えたものに加えて金1歩、4度目は金1歩2朱、5度目は金2歩、6度目は金2歩2朱、7度目は6貫352文と、回を重ねる度に褒美が増えていく。7度目以降褒美は変わらないが、衛門三郎に倣って21度目を廻り終えた遍路に対しては、どこに住んでいても大坂に庵を与えることを約束している。

26条目は、納経帳の施本が始まった享和2年（1802）にはなく、5万冊を超えた時点で新たに付け加えられた項目である。「納経供養五万人江施す事十三ケ年目二月中旬に成就いたし」とあるが、13年目が文化12年（1815）に当たることから、その年の2月に施本が5万冊に到達したものと考えられる。その時点で取り止めていたところ、讃岐の多度津に新しい港ができたことを契機に施本を再開することが記されている。大坂からの行きか帰りに備前や播磨の神社仏閣に参詣することを新たに勧めている。「沢山ハ銀百目、一ト通りハ五十目、始末ハ三十目、修行人ハ壺文も入不申」と、最後にそれぞれの経済力に応じた遍路に要する経費を示している。

『四国道中手引案内納経帳』は、旅の準備物をはじめ、食料や路銀、四国に渡海する航路、納経料、納札の体裁や必要枚数、道順や札所の概略などが26箇条にわたり記されており、大坂から遍路に出る者が不安を抱かないように、微に入り細に入り解説が加えられていることがわかる。『四国辺路道指南』と比べると、道順や札所の記述は簡略であるが、江戸時代後期には道標の整備が進んだものと思われるので、最低限の記述でも問題がなかったのであろう。それ以外の記述は『四国辺路道指南』よりもむしろ充実しており、とりわけ準備物や食事に関する記述は、「つわもの遍路」である元道の体験に根ざした実践的な内容になっている。

商人出身の元道らしく、数字を具体的に示した記述も目に付く。遍路の費用について、多くて銀100目、普通に廻るなら50目、儉約して廻ると30目としているのが一例として挙げられる。江戸時代の遍路の費用が実際にわかる記録は少ないが、延享4年（1747）に讃岐井関村の庄屋佐伯藤兵衛が43日間で遍路を行った記録では銀65匁9分5厘程度、寛政7年（1795）に伊予上野村の庄屋であった玉井元之進が61日間で遍路を行った記録では4貫文で銀60目相当、文化2年（1805）土佐朝倉村の西本兼太郎が32日間で遍路を行った記録では2500文程度で銀37匁5分相当とされている⁽⁴⁾。元道の感覚に従うと、雨の日も休むことなく先を急いだ西本兼太郎が儉約型、庄屋クラスの佐伯藤兵衛、玉井元之進が普通よりもやや贅沢型の遍路といえようか。元道が示した費用は、大坂からの遍路を想定したものと思われるが、残念ながら大坂からの遍路の記録はこれまでに見出すことができない。四国以外に居住する遍路の記録としては、越中太田本郷村の浮田家の隠居による天保14年（1843）のものがある⁽⁵⁾。これは半年間にも及ぶ長期の記録で、浮田家隠居は、四国遍路に加え西国33ヶ所巡礼・伊勢・高野山・善光寺まで足を伸ばしている。そのうちの遍路については60日間で、遍路期間中の経費が1人当たり1両2分程度とされている。銀に換算すると90目程度となり、これに大坂との往復を加えれば元道が贅沢と考える100目に近く、奥山廻り役を代々つとめた豪農の隠居にふさわしい豪華な旅といえる。このように実際の記録と突き合わせることで、元道が示した遍路の費用が現実 に即したものであったことがわかる。

『四国道中手引案内納経帳』の刊行は享和2年に始まり、12年と少しを経過した文化12年に当初の目標としていた5万冊に到達している。1年当たりに換算すると、4000冊の入門書付きの納経帳が配布され続けたことになる。それもただ配布するだけでなく、遍路の回数に応じて褒美を出すなど、遍路普及に向けて巧みな広報戦略が採られている。目標の5万冊を超えた後にも、大坂から讃岐多度津に渡海する航路を推奨する部分を加えて施本は継続されており、高月家に遺る納経帳には52,433人目の記載がある。最終的な配布冊数は不明であるが、他に類例のないユニークな試みとして注目される。これだけ短期間に大量の納経帳が配布されていることから、菱垣元道の施本活動は、上方における四国遍路の普及に大きく寄与したものと考えられる。

4. もう一人の遍路普及者「恵信」について

菱垣元道が上方における四国遍路の普及のため自費出版した『四国道中手引案内納経帳』を紹介したが、それでは近世後期の上方における遍路普及の動きは元道に限られたものであったのであろうか。元道以外にも遍路の普及に尽力した恵信という人物がいたことを村上紀夫氏、田井静明氏が明らかにされている⁽⁶⁾。

恵信の俗名は矢柄与右衛門といい、元道から22年遅れて安永5年（1776）に生まれている。15歳の寛政2年（1790）5月から遍路を始め、既に「四国徧礼式十壺遍無滞成就」しており、さらにはお礼参り12回の

都合 33 回を目指すなど、恵信は元道と同じ「つわもの遍路」といえる。文政 6 年（1823）3 月に、35 番札所清瀧寺麓の百姓家で「汝剃髪致し順拝いたさバ必ず善因と成りて後世可得善果」との夢告を受けた矢柄与右衛門は、8 月 12 日に浪華長堀の菩提家で得度、恵信を名乗る。長堀は堀川の水運を利用して土佐、阿波、日向などの全国の材木が集まり、材木市が開かれていた商業地なので、恵信も元道と同じ大坂商人の出身であった可能性がある。

恵信は得度した文政 6 年以降に、精力的に遍路の普及活動を展開する。最初に 12 番札所焼山寺麓にあり、前年 12 月に火事で焼失した衛門三郎旧跡、杖杉庵の再興に取り組み、文政 6 年春に庵室、通夜堂を再建するとともに、弘法大師・衛門三郎の木像を安置、自らの剃髪した髪の毛を衛門三郎の木像に植え付けている。また同じ文政 6 年 11 月には、「大坂浪華四国偏礼二十一遍大行者」として『四国偏礼略縁起』を刊行している。四国遍路の始まりとして衛門三郎伝説を詳しく紹介した版本で、そこには杖杉庵の焼け跡に「御杖杉焼失之株」が植えられ、その傍らに廻国巡礼の姿をした恵信がたたずむ挿絵が添えられている。その内容から、『四国偏礼略縁起』は杖杉庵の再興に関わり刊行されたものといえる。

また、本の末尾部分には、四国遍路する際の準備物、参拝方法、道順など、『四国道中手引案内納経帳』と同じくこれから遍路に出る旅人の利便になるような情報も記されている。巻末には「四國中偏礼道筋定宿名前」として、札所を中心に 120 カ所近くの宿泊場所の情報が掲載されているが、これらの宿の門口には、「大行者 恵信定宿」の書付を貼り出すこととされている。「富人また老人子共など四国ハ難所と聞怖れ、貧き人ハ路用をおもひて生涯願をとげず打過る人多」いため、木賃 12 文、ふとん 16 文、蚊帳 21 文の値段を定めた宿泊場所を示すことで、恵信は幅広い階層の人々が遍路に出るように呼びかけている。

杖杉庵の再建以外にも、恵信は遍路道に板橋、石橋を整備したほか、文政 11 年 11 月には 86 番札所志度寺の大師堂の再建勧進を行っている。文政 10 年に御室御所、仁和寺の成就山内に四国霊場の遙拝所を設けた御室 88ヶ所が開かれると、文政 12 年 5 月に寄進を募り、9 月に御室 88ヶ所内に宝篋印塔を完成させている。仁和寺は恵信に対して、「四国遍路日本惣大先達」の号を授与することでそれに報いている。

上方において遍路を普及するために、恵信は交通手段の確保にも力を入れ、紀伊加太浦（和歌山市加太）から四国に渡る渡海船の建造を発願している。加太浦は、関西方面から四国に渡る際の主要な港の一つで、淡路島の南側を通り、阿波の撫養や讃岐の引田まで行く船を出していた。加太浦から四国に渡海する船の運賃は銀 4 匁に定められており、その船賃がないため遍路に出られない者も多かった。そこで、恵信は加太浦の船頭たちと協議して、20 石積みの新しい船を 2 艘造り、毎日 1 人を無料で四国に渡海させる取り組みを企画している。元道が『四国道中手引案内納経帳』の施本を通じた遍路の普及に取り組んだのは文化期であるが、文政期に入るとそれを引き継ぐように恵信による幅広い遍路普及の動きが見られるのである。

なお、恵信が行った杖杉庵の再興であるが、元道も同じように番外札所の整備に関わっていたことを『宝抓取』の下巻に記されている。

当年ふ心願立惣高サ三尺壺寸五歩ふ六尺三寸迄の弘法大師の尊像を廿七体作り、一代の内に納度毎年一式体づゝ所々へ納む、既に摂津三ツ家村長楽寺へ納、直様作り懸阿州海郡郡鯖瀬村行基菴へ納め申候、望有る方ハ縁を求め御申越一尊宛納め申候

本文に「当年」とあるのは文化 8 年（1811）のことで、元道は様々な大きさの弘法大師像を 27 体つくらせて、毎年 1、2 体ずつふさわしい場所に奉納する計画を立て、手始めに摂津三ツ家村（大阪市淀川区）の長楽寺と阿波鯖瀬村（徳島県海陽町）の行基菴に奉納している。いずれも弘法大師ゆかりの寺であるが、鯖瀬の行基庵は、多くの遍路が訪れる番外札所の鯖大師のことである。これ以降も弘法大師像の奉納を通じて、元道が番外札所の整備に関わっていた可能性は高い。

また、恵信が加太浦において行った四国へ渡海する船の利用促進についても、元道はいち早く取り組んでいる。「四国道中手引案内」26 条目に記されていた多度津浦をめぐる宣伝活動である。その部分を改めて示すと、以下の通りである。

南都之御家来秋田弥三八といふ人来りて曰、此度讃州多度津浦に新湊出来、甚弁利宜敷、殊に金毘羅江壺里近し、四国順拝勝手宜敷、船上り切手料丸亀よりハ三拾文下直、宿賃も下直と語る、答夜前不思議之夢を見る、僧来り一書を渡す、開き見れば、善根可限時と有り、今日ハ其元之御咄し、全く弘法大師之進め成べし、多度津船ハ八軒家江戸屋庄兵衛といふ、金毘羅船宿と聞、此方江遣し置服薬と納札ハ手前より相渡す、猶又庄兵衛同道にて来られ候ハ、納経帳と、服薬と、納札と、上り切手料七十五文と、

散銭と、以上五品施し申候

元道は納経帳の施本が目標の5万冊に到達したので、施本を止めていたところ、興福寺の寺侍と思われる秋田弥三八という人物の訪問を受ける。秋田がもたらした情報とは、金毘羅からわずか1里の多度津に新しく港ができて、金毘羅参詣にも四国遍路にも都合が良いというもの。しかも船揚げり切手の費用が丸亀と比べて30文安い75文で、宿泊代も安いという。その日の明け方、僧侶が現れる不思議な夢を見ていた元道は、秋田の話は弘法大師の勧めによるものだろうと思い、大坂から多度津への船を出している八軒家の江戸屋庄兵衛のもとに行き、早速に薬と納札を寄付する。その後さらに、納経帳、船揚げり切手料と札所寺院への散銭を元道が寄付することになり、再び納経帳の施本が決定する。26条目の次の頁には、大坂から播磨灘を経て多度津へ行く航路が色摺りで示されており、その利用を強く呼びかける広告となっている。

5 おわりに

江戸時代の遍路の動向を研究した前田卓氏、新城常三氏によると、元禄前後にはまだ多くなかった遍路が、宝暦・明和期から安永期にかけて増えていき、文化文政期に頂点を迎えるとされている⁽⁷⁾。本稿では、遍路の最盛期とされる文化文政期に相次いで登場した、菱垣元道と恵信による上方における遍路普及の動きを紹介した。これまで当該期の遍路の普及を考える上で、二人のような民間宗教者の存在は視野に入っていなかったが、『四国道中手引案内納経帳』などの大量配布が可能な出版物の活用をはじめ、民間ならではのユニークな発想で展開した二人の遍路普及の試みは、上方における遍路の増加に一役買ったものと思われる。

また、この二人の民間宗教者に共通する点として、いずれも御室御所、仁和寺との関わりがあることが挙げられる。真言宗御室派の総本山である仁和寺が、西国の惣取締役として六十六部廻国巡礼に法度を発給していたことは広く知られる。その仁和寺が恵信に「四国遍路日本惣大先達」の号を与えているのは、恵信のような民間宗教者を媒介として、職業遍路を廻国巡礼と同様に一元的に管理する狙いがあったが、その試みは不成功に終わったとされている⁽⁸⁾。職業遍路の組織化には確かに失敗したのかもしれないが、仁和寺が民間宗教者を通じて増加しつつあった遍路を取り込もうとした点はどうであろうか。その点に関連して、仁和寺と東寺について、菱垣元道が『宝抓取』中巻に次のように記しているのは興味深い。

其弘法大師でさへ四十式才の厄崇りあり、是皆ミせしめ也、今御室御所の大師様これ也、故に厄年ハ御室様へ参り候ハバ厄崇なしといへり、東寺の大師様 禁裏守護の大師故諸堂南向なれども北向の大師日本に一躰なり、故に利生多く近年参詣市をなす

御室御所の大師が厄除けの大師、東寺の大師が禁裏守護の大師で、いずれも御利益が多いとする元道の言説は、大師信仰において両寺を一段高いところに置き、その下に四国霊場を位置づけようとする志向が感じられる。近世後期に仁和寺、東寺を参詣した後に四国遍路を廻る納経帳が現れるが⁽⁹⁾、そのことは、増加しつつある遍路を取り込みたい仁和寺と東寺、両寺の権威をバックに遍路の普及を進めたい民間宗教者、両者の利害が一致した結果ともいえよう。

ところで、元道が遍路の必需品とした納経帳であるが、真念の『四国辺路道指南』には用意するものとして納経帳は記されておらず、遍路を行う者に納経する習わしは元来なかったものと考えられる。四国遍路の納経帳の歴史を考察した武田和昭氏は、宝暦明和期に廻国巡礼の納経帳に影響を受けた遍路の初期的な納経帳が現れ、安永天明期に納経する遍路が徐々に増加し、文化文政期に一挙に増大すると整理している⁽¹⁰⁾。元道や恵信が遍路の普及活動を行った文化文政期に遍路の納経帳が定着していくというのである。「四国道中手引案内」において、元道は納経帳を持たない遍路を「鬼気遍路」として排斥し、納経帳を持つ遍路は持たないのに比べて7倍の功德があると説いているが、仁和寺と関わりがあり、廻国巡礼の経験もある元道のような民間宗教者の言説を通じて、文化文政期に遍路の納経帳が定着していったものと考えられる。小島博巳氏によると、六十六部納経帳は、諸国の神仏を一つのところに招き下ろした神名帳の意味をもち、神聖なものと考えられていたとしているが⁽¹¹⁾、元道はそうした納経帳を無料配布することで、遍路普及のツールとして見事に活用したことになる。

仁和寺、東寺と民間宗教者をめぐる遍路普及の動きは興味が尽きないが、これまであまり表には出てこなかった東寺においても、遍路の入門書といえる版本が配布されていたことを最後に紹介したい。それは『四国八十八ヶ所順拝心得書』という小冊子で（図版2）、巻末には文化8年（1811）5月の年紀とともに「京

都東寺茶所預和助」とあり、東寺の関与がうかがえる。表紙には高く険しい山を背景に笠をかぶり、杖を持ち、笈を背負った廻国巡礼の姿が描かれているが、『四国道中手引案内納経帳』の扉にあった元道の姿にイメージが重なる。内題は「手引道中記」で、札所、本尊、札所間の距離などが列記された後に本文が続くが、その多くは元道の「四国道中手引案内」の文章がそのまま使われている。末尾には、この小本一冊を「そこ豆わらちくひのつけ薬壺ふく」とともに施すとあるが、本と服薬をセットで配布していることにも元道との共通性がうかがえる。元道による『四国道中手引案内納経帳』の施本からやや遅れて、東寺においても同内容の遍路の入門書が配布されていたことになる。『四国八十八ヶ所順拝心得書』は、近世後期に上方で始まった菱垣元道による遍路の普及活動が広がりを見せたことを示しており、遍路の大衆化において元道が果たした役割は想像以上に大きかったものと考えられる。



図版2 『四国八十八ヶ所順拝心得書』

註

- (1) 本史料の翻刻は、喜代吉榮徳「四国道中手引案内—四国八十八箇所納経帳—」(『四国辺路研究』第18号、2001年)に掲載されている。
- (2) 『宝抓取』については、平川恵実子氏による一連の解説と翻刻がある。「凌霄文庫蔵『宝つかみ取』解説」(『語文と教育』第24号、2010年)、「凌霄文庫蔵『宝つかみ取』翻刻(1)」(『凌霄』第17号、2011年)、「凌霄文庫蔵『宝つかみ取』翻刻(2)」(『凌霄』第18号、2012年)。
- (3) 喜代吉榮徳「色札のこと—土御門神道の影響—」(『四国辺路研究』第18号(海王舎、2001年))。
- (4) 佐伯藤兵衛「四国辺路中万覚日記」(小野祐平「資料紹介 四国遍路道中日記」『ミュージアム調査研究報告』第6号、香川県立ミュージアム、2015年)、玉井元之進「四国中諸日記」(喜代吉榮徳『四国辺路研究』第12号、1997年)、西本兼太郎「四国中道筋日記」(喜代吉榮徳『四国辺路研究』第11号、1997年)。なお、遍路の費用については、佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』(人文書院、2006年)に詳しい記述がある。
- (5) 近藤浩二「越中からの四国遍路—「道中小遣留帳」を素材に—」(『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2014年)。
- (6) 村上紀夫「御室八十八ヶ所と恵信」(『近世勧進の研究—京都の民間宗教者—』法蔵館、2011年)、田井静明「香川県の木食・六十六部資料について—四国遍路に関連して—」(『ミュージアム調査研究報告』第6号、香川県立ミュージアム、2015年)。以下の恵信に関する記述は、両論文をもとにしている。
- (7) 前田卓『巡礼の社会学』(ミネルヴァ書房、1971年)、新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、1982年)。
- (8) 前掲註(6) 村上論文。
- (9) 御室御所、東寺を参詣した後に遍路を行っていることが確認できる納経帳としては、本稿で取り上げた高月古右衛門の『四国道中手引案内納経帳』のほか、文化6年(1809)の烏丸通五條下ル町の升屋徳兵衛の納経帳(愛媛県歴史文化博物館蔵)がある。また幕末のものとしては、御室御所と四国のうち三ヶ国参りをした文久元年(1861)の京都烏丸四條下ル町の永助の納経帳がある。
- (10) 武田和昭「四国辺路納経帳について—六十六部納経帳との関係—」(『四国辺路の形成過程』岩田書院、2012年)。
- (11) 小島博巳「近世の廻国納経帳」(『生活文化研究所年報』12号、ノートルダム清心女子大学生活文化研究所、1999年)。

【付記】

『四国道中手引案内納経帳』、『宝抓取』の利用にあたり、高月一氏にお世話になりました。末筆ながら感謝申し上げます。